

人文科学と情報処理

徳永 宗雄

京都大学文学部 教授

ここ数十年のデジタルテクノロジーの急速な進歩には驚くべきものがあり、今やコンピュータは社会の隅々にいきわたり、我々の生活と切り離せない存在となっている。また、インターネットの普及によって、社会のシステムや倫理だけでなく人間の思惟までも変化しつつある。大学では早くから理系学部を中心にコンピュータが利用されているが、文系学部でも近年コンピュータを使った研究が増えてきた。人文学、古典学も例外ではなく、膨大な文献資料をコンピュータで処理する研究者も昨今珍しくない。

このような状況を踏まえて京都大学大学院文学研究科は、昨年11月28日に文学研究科公開シンポジウム「高度情報化時代の人文学」を開催し、情報化時代の人文学研究方法の変化、人文学にとっての新たな研究領域、既存の研究対象の性格の変化、研究者の責任をめぐって、四名の講師が「文献学と情報処理」、「情報史料学の課題」、「情報化時代と文学のゆくえ」、「電子ネットワーク社会の情報倫理学」と題して、それぞれの専門分野から発表を行った。それらの発表の中から古典学に特に関係が深いと思われる点をふたつ紹介し、併せて、古典学が現在置かれている状況について考えてみたい。

情報化の時代に古典学が直面している第一の問題として、文字媒体の変化が挙げられる。コンピュータの発達により、電子テキストが書籍に取って換わりつつあるが、このことは単にテキスト媒体の変化にとどまらず、文献と文献研究の性格をも変えてしまう可能性がある。電子テキストの最大の特徴はテキストを自由に変更できること、つまりその可変性にある。電子テキストが可変であるため、書籍では出来ない膨大なデータ処理も可能となるが、このことはまた、テキストは簡単には変わらないという、活字テキストに慣れた我々の常識を破壊することにもなりかねない。電子テキストもCD-ROMに固定することはできるが、記憶媒体技術の急速な進歩を考えると、今日入力したCD-ROMテキストが数年後に読み出せる保証はほとんどない。また、たとえCD-ROMにしても、その都度新しい記憶媒体に合わせてテキストを変換しなければならず、電子テキストの可変性は本質的には変わらない。古典学の観点から危惧されることは、テキストが可変であるという意識が浸透すると、文献事

実に対する感覚が麻痺するのではないかということである。電子メールで明らかのように、電子テキストは「いつ、だれが、どこで」作成したがはっきりしない。また、それらの情報を故意に隠すこともできる。電子テキストの著作権がよく問題になるが、これは電子テキストが流動しており可変であることと関係している。文献事実に対する感覚が希薄になると、これはすでに一部の研究者に起こっていることであるが、文献の取扱い方が無責任になり、悪くすると、文献学を文献を用いた遊び(literainment)に変えてしまう。その意味で、可変テキスト(floatingtext)の普及は古典文献学の根幹にかかわる深刻な問題である。文献研究をliterainmentに終わらせないためには、少人数のクラスで長時間かけて文献の一字一句を丹念に調べる、伝統的な演習形式の授業が極めて重要と思われる。情報化時代にman-to-manの演習の重要性を再認識する必要がある。

もう一つの問題は「グレーゾーン」に関わるものである。コンピュータはデジタル技術の産物であるから0か1に還元出来ないデータを処理することはできない。そのため、0と1の間くらいとか、1に限りなく近いが1とは言いがたいようなアイデア、つまり、「グレーゾーン」に属するアイデアはコンピュータから排除される。「グレーゾーン」は存在しないと、存在しても研究の対象とはしないと考えるのは個人の自由であるが、少なくとも古典研究者である限りは「グレーゾーン」に対して無関心ではありえない。「グレーゾーン」には、研究が進めばクリアになる(一時的な)「グレーゾーン」とクリアになり得ない(本来的な)「グレーゾーン」の二種類がある。研究者である以上古典学者も前者の「グレーゾーン」は徹底的に究明しなければならないが、本来的な「グレーゾーン」を存在しないと考えたり、存在しても扱わないといった態度を採ることはむづかしい。コンピュータの利用が文献研究に浸透すると、コンピュータで扱えない本来的な「グレーゾーン」が研究対象から排除され、古典学の衰退に拍車がかかることも予想される。自然科学では一部の研究者がかなり前から、複雑系の研究として、本来の「グレーゾーン」に属すると思われる生命や精神の研究に取り組んでいる。複雑系の研究は人文学者にとっても興味深いだが、この研究はコンピュータでシミュレートした事象(仮想現実)を現実と錯覚しているにすぎないという意見もあり、安易にその手法を古典学に採り入れることはできない。情報化の時代に入り古典学は、可変テキストを使ってどのように実証研究を行うか、本来的な「グレーゾーン」の研究をどのように維持していくかという、ふたつの大きな問題に直面している。